



日本共産党 前都議会議員
そねはじめレポート
 2012年 2月8日発行 第 31 号

そねはじめ事務所
 114-0032
 北区中十条2-11-6
 Tel: 3907-1135
 Fax: 3906-3225

北区の共産党と後援会は今度こそ躍進をめざします
「次代のため」口実に原発・増税・貧困押しつけるな



●野田政権に「次世代」を語る資格なし

共産党北地区委員会と北区後援会は2月6日、赤羽会館で決起集会を開催し、各地域や職場などの後援会から党の躍進をめざして150名が参加しました。

新しく東京の比例代表候補に決まった宮本徹氏と、地元で小選挙区予定候補の活動を開始した池内さおり12区青年部長が、それぞれ「何としても躍進を」と訴えました。

宮本氏は「野田首相は次世代に何を残すかを考えると言うが、残すものが、危険な原発や重い庶民増税、若者の失業と貧困では、次代を語る資格はない」と批判し、財界やアメリカにしばられない日本をめざす共産党を前進させようと話しました。

●震災・原発事故の根底にある政治のゆがみ

年始街直に立つそね前都議と池内さおり予定候補

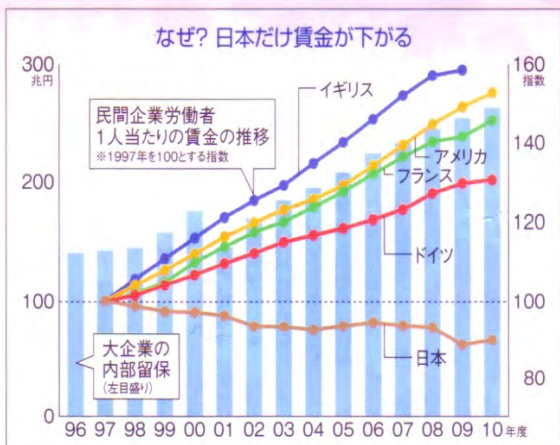
池内さおりさんは昨年、東電社員を親に持つ女子学生とともに被災地ボランティアに出かけ、「最大責任は現場の社員でなく、経営者と、その背後で原発利益をむさぼる官僚・財界・マスコミなどにある」と真剣に話し合い、共産党への信頼をえることができたことを報告しました。

集会では、共産党の遠藤久北地区委員長が活動方針を提案し、そねはじめ前都議が、予定候補の紹介とともに、北区の共産党と後援会が、いまどこに力を入れるべきかを訴えました。

●都内最大の議員団が区民要望実現と有権者への宣伝に全力を

そね前都議は、石巻を中心に被災地支援を継続しながら、北区での防災や放射線対策など子育て世帯の要望にこたえること、4月からの高齢者の介護保険・後期高齢・国保の保険料トリプル値上げにストップをかけることなど、区民の声にこたえる活動に全力を上げようと提案しました。

また北区の9名の議員団と来年都議再選をめざすそねはじめ前都議が力をあわせ、消費税に頼らない社会保障財源など、共産党ならではの政策を元気よく宣伝すること。なによりも共産党と後援会の知恵と力を集めようと呼びかけました。



資料:OECD"Economic Outlook(2010.5)"
 財務省「法人企業統計年報」、資本金10億円以上の金融・保険を除く全企業約5,000社。

なぜか報道されない！
給料が減り続けるのは日本だけ

90年代以降、不況時も景気回復期も一部の大企業だけが着々と内部留保を溜め込んできました。一方で若者の就職難と半数近くに非正規雇用が広がり、欧米と比べても、平均賃金が下がり続けているのは日本だけです。

この期間に日本では一貫して輸出大企業と株取引の資産家に減税が続きましたが、企業は内部留保に回しただけで国民に還元しなかったのは明らかです。

今後社会保障のためとして欧米並みの高い消費税をかけたとき、国民にみずからの年金や介護の財源を生み出すだけの消費購買力が残っているのでしょうか？

そねはじめ前都議が病院幹部と懇談、周産期医療充実と公的存続を要望 北社保病院が増設で【14年3月】343床の大病院へ

◆中庭に地上4階・地下2階で最新設備を

2月7日そねはじめ前都議は北社会保険病院を訪ね、事務長などと懇談し、最近看板が掲示された社保病院の増築計画をはじめ地域医療への貢献について親しく懇談しました。（写真は病院前の建築看板の横に立つそね前都議）

病院は今年から1年半をかけて中庭に地上4階・地下2階の建物を建設し63ベッドを増やす中で周産期医療の要・NICU（新生児集中治療室）3床をはじめ新生児保育室（GCU）や病児病後児保育など出産支援機能を充実させます。



◆防災・インフルエンザ対策も拡充

さらに救急患者の集中治療、一般病床や手術室、患者職員の食堂、事務機能も増やします。防災機能も、自家発電を1.7倍に増やし、地下の事務室には災害緊急時に医療ベッドが置ける設備と、2階は新型インフルエンザ流行に備え、密閉構造が可能な設計となっています。

◆練馬の光ヶ丘には小児医療で応援も

そね前都議が「練馬区光ヶ丘病院への応援で医療体制に影響は」と率直に聞いたところ、「光ヶ丘を引き受けるからには周産期医療と24時間小児救急を死守するため、当病院で最も余力がある小児科部門から5～6人の応援を検討中。もちろん当院の体制に影響はない」と話しました。

徳島や山梨、川崎の社会保険病院が売却となった問題では「60ほどの中で3ヶ所、赤字の病院で売却が進んでいるが、北社保病院は黒字に改善し、小児医療の特徴も備えて公的存続の条件は確立している。増設後も短期間で黒字に戻れる見通しで引きつづきがんばりたい」と話しました。

そねはじめ交友録<その二十五>

三浦綾子の「母」にヒントを与えたかもしれない？個人タクシーのNさん

20年前、板橋の国税事務所が個人タクシー事業者に「走行距離の半分は客を乗せていたはず」と勝手に課税しました。怒った運転手たちが、当時の中島武敏衆院議員に相談して税務署と粘り強く交渉し、不当な課税を撤回させたことから、今まで無縁だった個人タクシーの中に共産党ファンが一気に広がりました。

その後、中島議員とともに都営地下鉄やJRと交渉して高架下スペースを借り営業車の駐車場も実現して、さらに信頼が深まりました。

その“個タク”の一人でコワモテのNさんは、昔右翼の街宣車を運転していたと宴席で聞いたことがあります。ちょうどその頃刊行された三浦綾子作の「母」という、小林多喜二の母セキさんをモデルにした小説の中に、戦後かなり経ってから弟と一緒にタクシーに乗ったセキさんに、運転手が突然「俺は元右翼だが、小林多喜二の拷問はひどすぎる。多喜二は気の毒だ」と語りかけるシーンが出てきます。

ほとんどが実話による小説「母」の中でも、このエピソードだけは、セキさんではなく三浦綾子氏自身の体験だったことを、別の雑誌に書かれたエッセイで知りました。彼女は夫とともに弱い体をおして板橋の教会で講演したあと、ホテルまでタクシーに乗ったとき、いかにも柄の悪そうな運転手が突然話しかけたというのです。

すでにリタイアされたNさんとはお会いする機会もなく確かめるには至っていませんが、当時すでに共産党の熱烈ファンだったNさんが、板橋の会場から乗った夫妻を小林多喜二の取材をしている三浦夫妻だと知って、ちょっといたずら心で話しかけたのではないのでしょうか。

そんなエピソードも、個性派の個人タクシーのみなさんならありうることだと感じています。

09年の個人タクシーを考える会総会で挨拶する、そねはじめ都議（当時）

